徳島・徳島城下町跡

1　所在地　徳島市中徳島町二丁目
2　調査期間　一九九九年（平11）六月～二〇〇〇年二月
3　発掘機関　徳島市教育委員会
4　調査担当者　勝浦康守・北條ゆうこ
5　遺跡の種類　城下町跡
6　遺跡の年代　一六世紀後半～一九世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は徳島城下町を形成する六つの島のうち、徳島城が構えられた「徳島」に位置する。安政年間（一八五四～一八五九）に描かれた「御山下島分絵図・徳島」からは、調査地が徳島藩士「酒部丹後」「寺沢弥次右衛門」の両屋敷跡の一画に該当することがわかる。

（徳　島）

調査では、「酒部」「寺沢」両屋敷を区画する溝や柵列、大量の瓦や陶磁器を廃棄した土坑・井戸・池状遺構を確認し、屋敷裏地における土地利用形態を窺い知ることができる。

木簡は、酒部家屋敷の裏地に位置する池状遺構より出土した。その形態・規模は、長辺八m×短辺六mの長方形を呈し、深さ一・二～一・三mを測る。底部中央には升状の木組を設置しているが、用途は不明である。池状遺構は当初は溝と接続していたと考えられるが、後に溝への開口部に石組が構築され閉塞する。木簡は底部に堆積した層厚一〇～二〇cmの水成堆積層からの出土である。木簡の出土総数は一〇〇点余り。水成堆積層の中には木簡をはじめとする生活物資が廃棄されており、肥前産陶磁器や、木製品では木簡・箸・櫛・羽子板・傘・下駄・曲物・折敷・箒・ヘラ状製品などが出土している。

池状遺構の存続時期については、木簡に酒部家初代の「酒部勘左衛門」や二代目以降が度々使用する「酒部舎人」が見られることと、出土陶磁器の年代観との照合から、初代酒部勘左衛門が召出される寛永一七年（一六四〇）から二代目酒部舎人が隠居する元禄一一年（一六九八）頃までと考えられる。

その後、池状遺構は一七世紀末の屋敷裏地における土地改変に伴い、人為的に埋め戻されたと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・「〈酒部舎人様かぢこ　惣右衛門

・「〈上々□□　五□　(185)×31×5　039

(2)
・「〈酒部勘左衛門様御用かぢこ　惣右衛門」

・「〈□由良浜御番物七拾□□　」　171×28×4　032

(3)
・「酒部勘左衛門様〔御用カ〕□□　」

・「上々生諸白　梶や惣右衛門」　170×36×5　011

(4)
・「〈酒部舎人□　手嶋□□門
御内□　内より」

・「〈干鱈　」　266×25×4　032

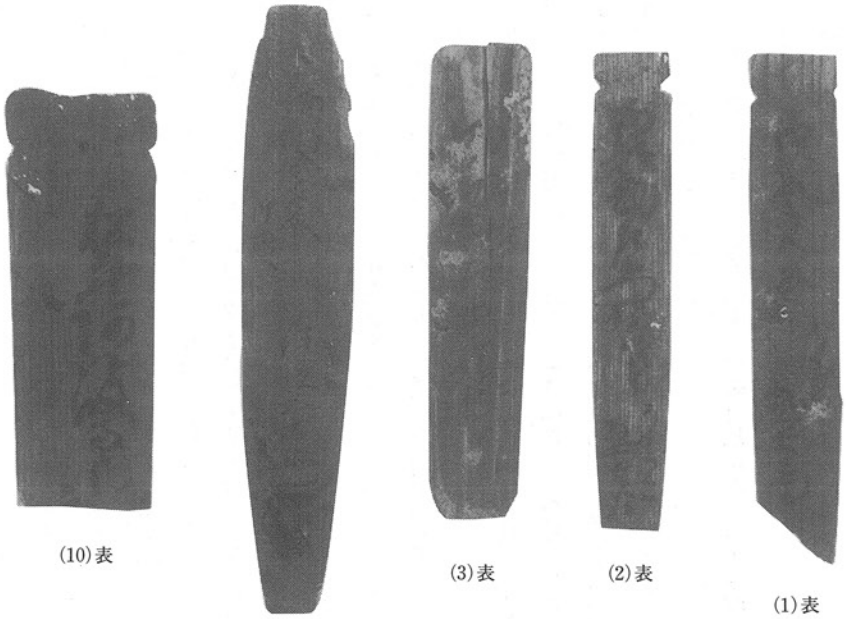
(5)
・「酒部舎人殿　伊吹五兵衛」
御内へ

・「　干鱈□枚　」　212×40×2　011

(6)
・「〈酒部舎人様　」

・「〈　下大野村
米五斗　喜左衛門」　177×25×6　033

(7)
米□□　田野村　九郎右衛門」　(147)×21×2　059



(1)表　(2)表　(3)表　(5)表　(10)表

(8)
・「〈□□様右衛門　は、」
　おりん参
・「〈□□　□□□　いなはより
　あ□□□あこ弐十　」　197×29×3　032

(9)
・「〈酒部舎人様内　□
　岡本□太夫□　□□
・「〈　か□す　□」　(152)×(41)×5　039

(10)
・「〈。松平阿波守内
　□
・「〈。松平阿波守内
　□　(142)×51×8　039

ここでは、整理がすんだもののうち、一〇点を掲載する。木簡はいずれも荷札であり、表に受取人と送り人の名前、裏に送り荷の品名を書くのが基本パターンである。

(1)～(3)の「かぢこ惣右衛門」や「梶や惣右衛門」は、酒部家の当主に対する敬称に「様」を使用していること、また、送り荷に「生諸白」が見られること、さらに、品物が「由良浜御番」(淡路の由良に置かれた番所)を経由させていると考えられることから、物資の調達に動いた商人の名である可能性がある。

一方、(5)の伊吹五兵衛は、酒部家当主に対し、敬称に「殿」を使用していることから、この木簡は武士間での物のやりとりを示すものである。「干鱈」は上級藩士である「酒部舎人」に対し「伊吹五兵衛」から送られた贈答品であると考えられる。正月などの祝祭事あるいは季節時に行なわれる贈答慣習を示す可能性がある。

(6)(7)は、酒部家の所領地である「下大野村」(阿南市・羽ノ浦町)や「田野村」(小松島市)から得られる米が、年貢米として納められていることを示すものであり、徳島藩の統治制度である地方知行を裏付けるものである。ここに紹介する資料以外にも、「五斗」の記載が多く見られることから、「五斗」が基本単位の数量と考えられる。

(8)(9)は酒部家の俸給を受ける者(おりん・岡本□太夫)たちへ荷が送られる際に使用されたものと考えられる。

(10)は「松平阿波守内」より下を欠損するが、「酒部……」と続くことが想定される。阿波国外から品物を送る場合の標記方法の一例を示す可能性が考えられる。

このように今回出土の木簡は、一七世紀後半の武家社会における物資流通の具体的な様相を窺い知ることのできる資料である。

なお、木簡の釈読にあたっては、徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏にご教示いただいた。

(勝浦康守)